●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

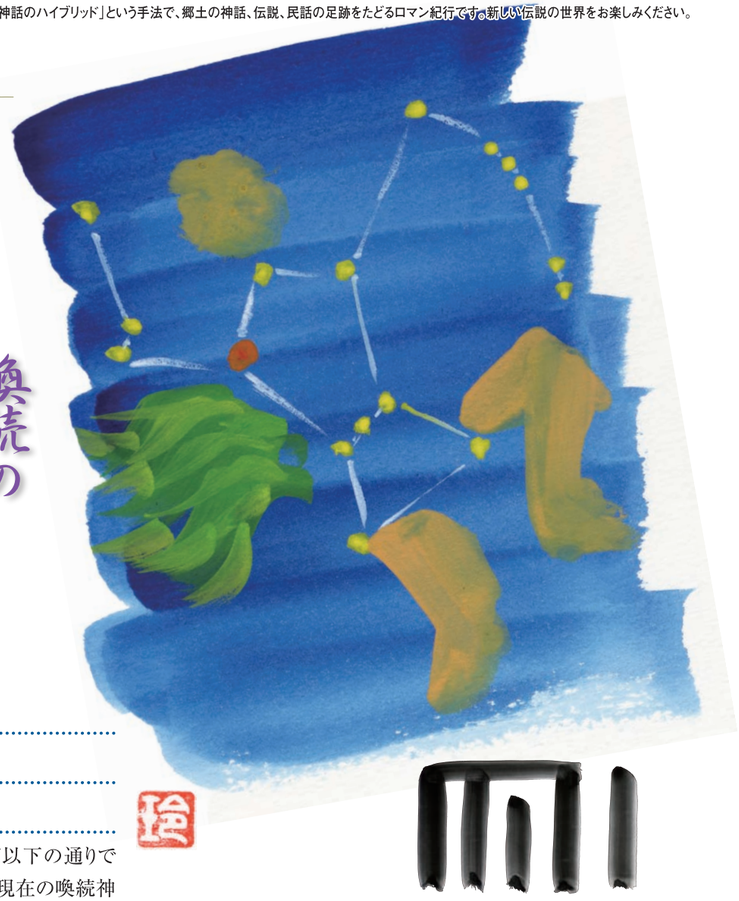
SHINWA WALK 28

28th Letter

喚続神社の隕石伝説

伝説そぞろ歩き

喚続の
星降る村に
立つ社
蛍のごとく
隕石光る



日本最古の隕石祀る神社

星にまつわる地名も点在

喚続（よびつぐ）神社の創始は、言い伝えによれば以下の通りです。大永3年（1523年）、高潮により幾度か現在の喚続神社西の海岸堤防が決壊しました。そこで村人は伊勢神宮へ祈願して1万回のお祓いを受けて、ようやく頑丈な堤防が完成し、これを記念して喚続神社が建立されたといわれています。

そのため、西方、伊勢神宮に向けて（実際は伊勢神宮は南にあたりますが、当時は船で西方に向かったため）社殿を建立したといわれています。

祭神は天照大神（あまてらすおおみかみ）、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）、国常立尊（くにのとこたちのみこと）で、建築様式は立派な神明造です。社宝として日本最古の隕石が祀られていることでも知られています。これは寛永9年（1632年）8月14日（太陽暦で9月27日）の夜、落下したのを地元の塩屋の主人・村瀬六兵衛が拾い、その子孫が喚続神社へ寄進したものです。

重さ約1kg、黒褐色をした三角形の石で、昭和51年（1976年）、国立科学博物館（東京・上野）に依頼して鑑定が行われ、日本最古の隕石と判明しました。

また、喚続神社周辺には「星崎」「星宮」など星にまつわる地名も残っていて、星に縁のある地域といえます。星宮は笠寺台地の最南端にあたり、かつては東に鳴海潟、西に年魚市（あゆち）潟を分けた岬の部分でありました。星宮は星崎城築造の時にこの地に移され、常夜燈の灯りは海上を往来する舟の航行の目印になっていたと伝えられています。

日本武尊（やまとたけるのみこと）とのロマンスで有名な宮簀媛命（みやずひめのみこと）の父・乎止与命（おとよのみこと）を祀る上知我麻神社、母・真敷刀俾命（ましきとべのみこと）を祀る下知我麻神社は星宮の高台上に並んでいて、両社とも鎌倉時代に熱田神宮内へ摂社として移されています。

社宝として日本最古の隕石が祀られている喚続神社。

狩り名人は乙女もハント

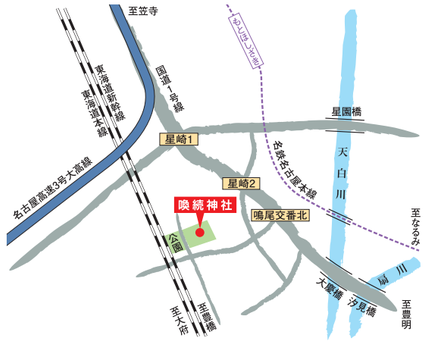
オリオン座が語る真実

星が降ってきた話でしたが、星座の中でも代表格といえば、冬の夜空に燦然ときらめくオリオン座です。これは、ギリシャ神話の「オリオン」とも関係しています。

オリオンは、海の神・ポセイドンと海の女神・アムピトリテの息子です。とにかく美男子で狩りの名人として知られ、その腕前は動物を追いかけて仕留めるのはもちろん、美しい乙女をハントする名人でもありました。

オリオンは、アトラスの7人の娘たち・プレアデスを見て心を奪われ、後を追いかけ回します。困り果てた娘たちは、自分たちの姿を変えてくれるよう神々に祈りました。不憫に思ったゼウスが娘たちを鳩に変え、プレアデス星団（スバル）にして大空に置いたのです。

また、オリオンは酒の神ディオニュソスの孫娘・メロペにも恋をします。しかし、結婚の許可を得る前にメロペと結ばれてしまい、怒った父のオイノピオンから両眼をえぐられてしまいます。その後、暁の女神・エオス（オーロラ）と結ばれ、エオスの兄・ヘリオスの力添えで、視力が元通りに回復します。エオスはオリオンのところへ急いで戻るため、夜明けの時間が短くなったといいます。



エオスがどうして急いで帰るのか、不審に思ったアルテミスがエオスの後を追い、オリオンと出会うことになります。お互い狩りの名人という共通点から意気投合し、恋人関係になりました。ここで面白くないのが、アルテミスの双子の兄・アポロンです。

オリオンに殺意を抱き、大地の女神・ガイアに頼んで、巨大なサソリでオリオンを殺させようとしました。オリオンはサソリから逃げるため、海に逃げました。

それを見たアポロンはアルテミスに「いくら弓の名手でも、海中のあの遠くの黒いものは射抜くことはできないよね」とけしかけ、あまりに遠くてオリオンと気づかなかったアルテミスは、海中のオリオンの頭を射抜いてしまったのです。

アルテミスはオリオンを海から引き上げ、天に掲げました。それがオリオン座ですが、星座になった今でも、猟犬のシリウス（大犬座）を従えながら、手に入らなかったプレアデス星団を追いかけ、サソリ座に追いかけられています。

オリオン座が示す位置関係は、オリオンの人生の縮図。正確に言うなら、星座を元に古代ギリシャ人が物語を紡ぎ、ギリシャ神話のいくつかが誕生。オリオンの伝説もその一つなのです。

※次回は氷上姉子（ひかみあねご）神社伝説について特集します。
お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei
■ 取材・文／Icarus